中学生の自己概念と適応

平井誠也・村田義幸*

A Study of the Self-Concept and Adjustment in Junior High School Pupils

Seiya Hirai and Yoshiyuki Murata

目　　的

自己概念は，内的関係枠として人間行動の理解・予測に際して重要な位置を占めていることが指摘されており，とりわけ Rogers (1947) や Combs (1948) によって現象学的接近が提唱されて以来，自己概念と適応の関係に関する数多くの実践的研究が行なわれてきた。それらの研究は，カウンセリングの過程において，クライエントの自己自身に対する見方が次第に肯定的な方向に変化していくことを，内容分析の手法によって示した Raimy (1948) の先駆的な研究に端を発したが，次第にその範囲を越えてクライエント以外の一般の人々をも対象とするより広い適応の指標として自己概念を取り扱っていこうとする試みがなされるようになった。

適応の指標としては，Bills et al. (1951) のごとく「現実自己 (real self，以下Rと略す)」と「理想自己 (ideal self，以下Ｉと略す)」との差異を測定するものが大勢を占めており，今日では，ＲとＩの差異の大きいことが内的不適応の指標となり得ることが多くの研究者によって指摘されている。つまり，自己概念と適応の関係は，一義的・直線的関係であると大多数の研究者は仮定しているのである。しかし，他方においては，自己概念と適応の関係はそのように単純なものではなく，曲線的な関係にあると主張する研究者もいる。さらに，曲線的関係を強調する研究者の中でも，Block & Thomas (1955) は高すぎる自己満足も，低すぎる自己満足も共に不適応を示すというのに対して，Chodorkoff (1954) は，まったく逆に，自己満足の中位の者が不適応であると主張している。

また，ＲとＩの差異という単純な視点のみでなく，その個人にとって重要である他者（父・母・友人等）から自分がどのように見られていると認知しているかという「他者自己（以下Ｓと略す)」の導入の必要性を主張する者（椎野，1966）もあれば，もっと単純に，Ｒそのものを重視する者（菅，1975）もある。

このように，自己概念が個人の行動理解や適応に関して重要な役割を演じていることが強調されながらも，両者の関係についてはなお多くの問題が残されている。

そこで本研究では，自己概念と適応の関係はいかなる関係にあるのか，また，適応の指標としては，どの自己概念が有効であるかを吟味することを目的とした。

自己概念を測定する方法としては，従来より，内容分析・Ｑ分類・質問紙法・投影法・

＊活水女子短期大学

adjective check list 法・Semantic Differential 法などが試みられてきたが，なかでも，Osgood et al.（1957）の開発した Semantic Differential 法はパーソナリティーを数量的・操作的にとらえる用具としても研究が進められてきており，わが国では，長島ら（1965，1966）が中学生，高校生，大学生，成人の各発達段階ごとに自己概念記述尺度（self-differential scale，以下ＳＤ尺度と略す）を開発しており，児童用ＳＤ尺度も鈴木（1974）によって作製されている。

本研究では，自己概念の測定用具として，長島らのＳＤ尺度 Form M に新たに５尺度加えた42尺度からなるＳＤ尺度を用いた。

被験者である中学生の適応の良否を診断する方法としては，面接をはじめ，性格検査，適応度調査，学業成績，担任教師の評定，出欠状況記録などが考えられるが，本研究では長島等によって作製された適応性診断テストの結果を適応度を示す１つの指標として用いた。

方　　法

１）手続き：自己概念の測定に関しては，長島ら（1965，1966）の開発したＳＤ尺度 Form M の37尺度に新たに５尺度を加え42尺度を評定尺度として，各学級ごとに集団的に実施し，７段階評定させた。加えた尺度は中学生にとって適応と深いかかわりをもつであろうと考えられた学業成績，身体，容貌に関する形容詞対で，頭の鋭い―頭の鈍い，学業成績の良い―学業成績の悪い，みにくい―きれい，ものおぼえが良い―ものおぼえが悪い，スタイルのよい―スタイルのわるいであった。

なお，各尺度の＋，－の方向は２名の研究者で決定された。評定の順序は，Ｒ，Ｉ，Ｓの順に各自己の評定が終了するごとに評定用紙を回収して，それぞれ独立に実施し，それぞれの評定ができるだけ干渉しないように注意が払われた。

各自己の教示は次のとおりであった。

(1)　Ｒについての教示：「両端に反対の意味をあらわす形容詞がならべてあり，身体や性格の特徴などを示しています。現実のあるがままの自己について考て，めもりの上の最も適当と思うところに○印をつけて下さい。」

(2)　Ｉについての教示：Ｒに関する教示における下線部分が「…自分ができればこうありたいと思う理想の姿について考え……」にかわる。

(3)　Ｓについての教示：Ｒに関する教示における下線部分が「……あなたにとって最も大切な人（父母，先生，友達など）があなたをどのように思っていると思うかについて……」にかわる。

適応度の測定には長島らによって作成された新訂適応性診断テスト小学校５年～中学校３年が自己概念測定終了後実施された。

２）調査対象　長崎大学教育学部附属中学校２年生　229名。

３）調査月日　昭和51年５月21日。

結　　果

資料として２年生229名の結果が得られたが，本研究で分析された結果はその中からラ

表1　各尺度ごと及び全体の平均得点

No.	尺度	R	I	S
1	頼もしい―頼りない	4.08	6.15	4.00
2	責任感のある―無責任な	4.42	6.53	4.24
3	体の丈夫な―病弱な	5.38	6.68	5.27
4	おしゃべりな―無口な	3.08	3.64	3.04
5	頭の鋭い―頭の鈍い	4.01	6.03	3.90
6	話しやすい―話しにくい	4.92	6.43	4.70
7	好きな―嫌いな	4.67	6.23	5.07
8	たくましい―弱々しい	4.57	6.07	4.37
9	学業成績のよい―学業成績のわるい	3.62	6.38	3.96
10	熱心な―不熱心な	4.33	6.53	4.27
11	おもしろい―つまらない	4.83	6.23	4.98
12	きれい―みにくい	3.80	6.37	4.11
13	やさしい―こわい	4.90	6.36	4.89
14	強い―弱い	4.63	5.71	4.43
15	陽気な―陰気な	5.32	6.23	5.17
16	暖かい―冷たい	5.01	6.42	4.98
17	たのしい―さびしい	5.13	6.41	5.25
18	清潔な―不潔な	4.97	6.53	4.53
19	神経質な―無神経な	4.66	4.71	4.24
20	気前のよい―けちな	4.46	5.30	4.46
21	速い―遅い	4.15	6.24	4.07
22	ものおぼえのよい―ものおぼえがわるい	4.12	6.51	4.16
23	ていねいな―乱暴な	4.08	6.18	4.20
24	きちんとした―だらしない	4.22	6.37	4.10
25	素直な―意地っぱりな	3.84	6.27	4.13
26	静かな―うるさい	3.96	5.18	3.47
27	幸福な―不幸な	5.36	6.53	5.46
28	スタイルのよい―スタイルのわるい	3.39	6.11	3.80
29	用心ぶかい―不用心な	4.72	5.39	4.45
30	まじめな―ふまじめな	4.04	5.87	4.11
31	頭のよい―頭のわるい	3.72	6.39	4.00
32	積極的な―消極的な	4.00	5.97	4.18
33	心強い―心ぼそい	4.02	6.13	4.27
34	おちつきのある―おちつきのない	3.68	6.01	3.59
35	楽観的な―悲観的な	4.75	5.91	5.09
36	ゆかいな―ふゆかいな	4.85	6.12	4.90
37	派手な―地味な	4.03	4.18	4.12
38	外向的な―内向的な	4.36	5.22	4.47
39	親切な―不親切な	5.07	6.50	4.85
40	気長な―短気な	4.33	3.32	4.43
41	気が強い―気が弱い	4.23	5.46	3.97
42	明るい―暗い	5.25	6.52	5.45
	全体	185.0	249.5	185.2

表２　42尺度のバリマックス因子負荷量

尺度＼因子	1	2	3	4	5	h^2
1	0.436	0.266	0.090	0.278	0.002	0.346
2	0.364	0.388	0.268	0.085	0.045	0.364
3	0.093	−0.059	−0.082	−0.055	0.009	0.022
4	−0.688	0.139	0.111	−0.277	−0.046	0.584
5	0.281	0.586	−0.031	0.194	0.097	0.470
6	0.659	−0.064	0.137	0.078	−0.016	0.463
7	0.386	0.067	0.038	0.209	0.223	0.248
8	0.319	0.016	−0.214	0.236	0.079	0.210
9	−0.001	0.743	−0.045	0.037	−0.013	0.556
10	0.212	0.391	0.048	0.211	0.081	0.251
11	0.579	0.103	−0.003	0.073	0.133	0.369
12	0.310	0.166	0.164	−0.007	0.915	0.988
13	0.107	0.137	0.168	−0.262	0.179	0.159
14	0.533	0.050	−0.083	0.209	0.085	0.344
15	0.965	0.065	0.012	−0.038	−0.002	0.937
16	0.560	0.135	0.128	−0.058	0.147	0.373
17	0.609	0.079	0.008	−0.037	0.042	0.380
18	0.457	−0.049	0.413	−0.037	0.066	0.388
19	0.002	0.116	0.540	−0.109	0.174	0.347
20	0.343	−0.037	0.040	−0.057	0.187	0.159
21	0.323	0.166	0.239	0.151	−0.115	0.225
22	0.235	0.454	0.031	0.173	−0.037	0.294
23	0.064	0.266	0.949	0.016	0.016	0.976
24	0.270	0.225	0.694	−0.064	−0.128	0.626
25	0.053	−0.074	0.192	−0.433	0.324	0.338
26	−0.418	−0.084	0.346	−0.210	0.066	0.350
27	0.375	0.248	−0.009	0.047	0.290	0.289
28	−0.051	0.289	−0.016	−0.092	0.591	0.444
29	0.190	−0.071	0.321	−0.104	0.262	0.224
30	0.012	0.485	0.248	0.034	−0.036	0.299
31	0.085	0.979	−0.003	−0.036	0.000	0.967
32	0.480	0.107	−0.026	0.309	0.138	0.357
33	0.557	0.059	−0.305	0.180	0.059	0.443
34	−0.013	0.308	0.270	0.191	0.052	0.207
35	0.521	0.011	0.018	−0.032	−0.137	0.292
36	0.666	0.018	0.081	−0.046	0.102	0.463
37	0.342	−0.135	−0.261	0.103	−0.012	0.214
38	0.507	0.043	−0.137	0.376	0.086	0.426
39	0.479	0.179	0.189	−0.072	0.186	0.337
40	0.071	−0.033	−0.148	0.226	−0.110	0.091
41	0.277	0.056	−0.089	0.954	0.009	0.998
42	0.896	0.036	0.041	0.015	−0.021	0.806
全分散	7.626	3.286	2.801	2.093	1.871	17.624

ンダムに選択された２クラス92名（男子45名，女子47名）に関してである。

(1) 自己概念の測定

42尺度の評定結果は「最も望ましい」を７点，「最も望ましくない」を１点として数量化された。各尺度ごとの平均得点および全体の平均値は表１に示された。

ＳＤ法による自己概念評定の平均値はＲは 4．4，Ｉは 5．9，Ｓは 4．4 で，各自己とも全体的に望ましい方向にあった。Ｉの結果は中学生の理想像の理解とともに，各尺度の方向性の妥当性をみる指標でもある。しかし，名尺度をよく検討してみると両端に寄らず中庸が最も望ましい尺度も存在することが分る。

おしゃべりな―無口な，神経質な―無神経な，派手な―地味な，気長な―短気な，などの尺度は中間的に評定されるのが望ましいことを表１は示している。

つぎに，中学生における尺度の意味次元を測定するために因子分析により因子抽出を行なった。長島ら（1966）が最終決定した37尺度にわれわれが新たに５尺度を加え，42尺度によって実施されたので，42×42の相関係数が算出され，直接バリマックス法によって因子抽出した。計算は長崎大学教育学部教育工学センターのTOSBAC―40Cにより，芝（1972）の直接バリマックス用計算プログラムを TOSBAC―40C 用に教育工学センターの手によって改訂されたプログラムを使用してなされた。その結果は表２に示された。第１因子として向性，第２因子として知性，第３因子として誠実性の因子が抽出されたが，第４因子以下は0.40以上の負荷量をもつ尺度が少なく命名は困難であった（表３―１，表３―２，表３―３）。

表３―１　第１因子（向性）負荷量

15	陰気な	陽気な	0.965
42	暗い	明るい	0.896
④	無口な	おしゃべりな	−0.688
36	愉快な	不愉快な	0.666
6	話しやすい	話しにくい	0.659
17	楽しい	さびしい	0.609
11	おもしろい	つまらない	0.579
16	暖かい	冷たい	0.560
33	心強い	心ぼそい	0 557
14	弱い	強い	0.533
35	楽観的な	悲観的な	0.521
38	内向的な	外向的な	0.507
32	積極的な	消極的な	0.480
39	不親切な	親切な	0.479
18	清潔な	不潔な	0.457
1	頼りない	頼もしい	0.436
㉖	うるさい	静かな	−0.418

表３―２　第２因子（知性）負荷量

31	頭の悪い	頭の良い	0.979
9	学業成績の良い	学業成績の悪い	0.743
5	頭の鋭い	頭の鈍い	0.586
30	まじめな	ふまじめな	0.485
22	ものおぼえの良い	ものおぼえの悪い	0.454

表３―３　第３因子（誠実性）負荷量

23	ていねいな	らんぼうな	0.949
24	だらしない	きちんとした	0.694
19	無神経な	神経質な	0.540
18	清潔な	不潔な	0.413

(2) 適応度の測定

適応性診断テストの結果は表４に各特性ごとのパーセンタイル段階で示された。性差は各特性とも平均値間に有意差が見いだされなかったので，全体で示された。学校関係63.3％ ile，退避的傾向57.7，異常傾向57.0が高く，

表4　適応性診断テストの各特性のパーセンタイル段階

特性／被験者	異常傾向	神経質傾向	自尊感情	退避的傾向	自己統制	個人適応	社会的技術	統率性	家庭関係	学校関係	近隣関係	社会適応	適応性(総計)
男	56.6	53.4	44.4	55.5	43.1	45.3	52.2	52.5	47.9	63.4	46.8	51.9	49.7
女	57.3	42.6	44.2	59.8	48.2	45.8	58.4	56.8	39.3	63.2	47.2	50.9	48.3
全体	57.0	47.9	44.3	57.7	45.7	45.5	55.3	54.7	43.5	63.3	47.0	51.4	49.0

家庭関係43.5，自尊感情44.3，個人適応45.5，自己統制45.7など低く，適応性全体としては49.0であった。とくに，女子の家庭関係が39.3% ile と最も低い適応度を示した。学校生活では一応適応しているが，家庭生活に問題が残されていることを示している。

(3)　自己概念と適応の関係

本研究の主目的は自己概念と適応の関係を明らかにすることであった。各自己概念間の差と適応度テストの各特性との関係を検討するために，両者の相関係数が算出された。その結果は表5に示された。結果は全ての特性および全体との間に負の相関が見いだされ，差が大きければ，適応度が低いという結果が示された（表5では負記号は省略された）。I－Rの差（D_{IR}）は異常傾向，個人適応，適応性全体と相関が高く，R－Sの差（D_{RS}）は近隣関係と，I－Sの差（D_{IS}）は異常傾向，適応性全体と相関が高い。D_{IR} および D_{IS} が適応度と密接な関係にあることが明らかにされた。

表5　各特性と自己概念間の差の相関

特性／自己概念	I－R	R－S	I－S
異常傾向	0.420	0.321	0.396
神経質傾向	0.388	0.330	0.251
自尊感情	0.286	0.214	0.368
退避的傾向	0.313	0.240	0.331
自己統制	0.213	0.206	0.186
個人適応	0.433	0.362	0.327
社会的技術	0.322	0.141	0.334
統率性	0.233	0.114	0.194
家庭関係	0.162	0.287	0.142
学校関係	0.230	0.115	0.149
近隣関係	0.131	0.479	0.167
社会適応	0.326	0.242	0.303
適応性（総計）	0.403	0.300	0.390

つぎに，適応性診断テストの結果70% ile 以上を示したものを高適応度群（H群，N＝32）とし，30% ile以下を低適応度群（L群，N＝33）とし，その中間のものを中適応度群（M群，N＝25）として3群に分け，各群における自己概念値が検討された。

Rに関しては，平均値がH群・M群・L群それぞれ200.8, 187.3, 169.7となった。分散分析の結果，F＝8.33（dfは2と87）となり，P＜0.01で有意であった。t検定の結果，H群とL群の間でP＜0.001で有意であり，また，M群とL群の間はP＜0.05で有意

差がみられた。しかし，H群とM群の間は有意でなかった。

Ｉの結果は平均値がH・M・L群でそれぞれ，256.5，250.2，241.4 であり，分散分析の結果，F＝4.56（dfは２と87）で，５％で有意であった。ｔ検定の結果，H群とL群の間で１％水準で有意差が見いだされた。しかし，H・M群およびM・L群の間には有意差は見いだされなかった。

Ｓに関してH・M・L群のそれぞれの平均値は203.0，186.4，168.9 であった。分散分析の結果，F＝15.55（dfは２と87）となり，P＜0.001で有意であった。ｔ検定の結果はH・L群，H・M群，M・L群のいずれの群間においても１％水準で有意差が見いだされた。

以上R，Ｉ，Ｓの全ての自己概念間で有意差が見いだされたが，ＳがH・M・L群の弁別に最も効果的であることが示された。

つぎに，H・M・L群と D_{RI}，D_{RS}，D_{IS} の関係はどうであろうか。

D_{RI} に関しては，H・M・L群の平均値はそれぞれ，160.6，206.4，268.0 であった。分散分析の結果，F＝7.23（dfは２と87）で，P＜0.01で有意であった。ｔ検定の結果はH群とL群の間に0.1％水準で有意であったが，H・M群およびM・L群の間では有意でなかった。

D_{RS} に関しては，H・M・L群の平均値はそれぞれ，58.2，65.4，108.6 であった。分散分析の結果，F＝5.19（dfは２と87）となり，１％水準で有意であった。また，ｔ検定の結果はH・L群間は１％水準，M・L群間は２％水準で有意であったが，H・M群間は有意でなかった。

D_{IS} に関しては，H・M・L群の平均値は167.5，213.0，302.8であり，分散分析の結果，F＝7.00（dfは２と87），P＜0.01で有意であった。なお，ｔ検定の結果はH・L群間に0.1％，M・L群間に５％でそれぞれ有意であったが，H・M群の間は有意でなかった。

考　　察

長島ら（1966）はSelf-Differential の作製において，因子分析を行ない，自己概念の有意味な次元を抽出し，その次元の発達段階（中学，高校，大学）による相異を検討している。

中学生の場合，５つの自己概念 (1)現在の私，(2)父親からみた私，(3)母親からみた私，(4)理想の私，(5)友だちからみた私について，45尺度で７段階評定させ，その結果をセントロイド法および主因子解法によって因子を抽出し，バリマックス法により直交回転している。中学生の因子構造として，第１因子（誠実性），第２因子（向性），第３因子（情緒安定性），第４因子（強靱性）第５因子（過敏性）が見いだされ，第５因子までで全分散の52％を説明した。これはバリマックス回転後の因子行列について負荷量が0.40以上を有意味として処理された。長島らの第１因子が本研究の第３因子にあたり，同じく，第２因子がわれわれにおいては第１因子となっている。また，本研究で新しく付加された尺度を中心として第２因子が構成されている。しかし彼等によって見い出された第４因子，第５因子は本研究では独立せず，強靱性に属する積極的な―消極的な，頼りない―頼もしいの尺度は第１因子に含まれている。

R，I，Sのいずれにおいても，分散分析の結果有意差があり，高適応度群が低適応度群より望ましい方向に自己を評定していることが見いだされた。菅（1975）はソシオメトリーによって測定された対他者関係良好群と不良群について，小中学生の現実自己，理想自己を分析しているが，現実自己は良好群が不良群より有意に高く定位され，また，有意ではなかったが理想自己も良好群が高く定位されていることを示した。本研究では現実自己，理想自己，他者自己いずれも高適応度群が低適応度群より高く定位され，R，I，Sそれ自体も適応の指標として有効であることが明らかになった。

また，D_{RI}，D_{RS}，D_{IS} も分散分析の結果，高適応度群が低適応度群より小であった。この結果は Bills et al,（1951）の結果と一致し，椎野（1966）とも一致している。椎野は他者自己を友人，母親，父親から見られていると推測する自己で測定しているが，とくに，友人からみられている自己と現実自己の差が適応と最も多くの領域で有意味な関係にあることを見いだしているが，被験者は大学生であった。本研究の他者自己は自分が最も大切だと思う人であり，これは各人により異なるが，結果としては椎野の結果と同様，適応度の指標として，他者自己も有効であることが示された。

自己概念と適応の関係については一義的・直線的関係であるか，それとも曲線的関係であるのか意見の分れるところであるが，本研究では Block & Thomas（1955）や，Chodorkoff（1954）の主張する自己概念と適応の曲線的関係は見られず，Bills et al.（1951）や椎野（1966）と同様，理想自己と現実自己および現実自己と他者自己の差が大きい者ほど適応度も低いという関係が見いだされた。しかし，この結果はあくまでも，適応度テストによって測定された適応・不適応であり，いわゆる臨床場面における適応者，不適応者を取り扱ったものではない。したがって，今後これらの臨床面からの自己概念と適応の関係が検討されることが望まれる。

要　　約

本研究は長島らが開発した Self-Differential の尺度に中学生の適応に関係深いと思われる学業成績・身体・容貌に関する尺度を加え自己概念を測定した。自己概念は現実自己，理想自己，他者自己であり，他者自己は自分にとって最も大切と思う他者が自己をどのように思っていると推測するかを測定した。結果は三つの自己とも平均してより望ましい方向に評定された。

つぎに，適応性診断テストが実施され，その結果と自己概念の関係が論じられた。適応性診断テストの結果で70% ile 以上の者を高適応度群，30% ile 以下の者を低適応度群，その中間の者を中適応度群として現実自己，理想自己，他者自己が比較され，いずれの自己においても高適応度群が低適応度群より自己概念を高く評価していた。またそれぞれの自己概念間の差（Dスコア）が適応の指標として重要であることが今まで論じられてきたが，低適応度群は高適応度群と比較してDスコアが有意に大であることが明らかにされ，自己概念と適応度との関係が Block & Thomas（1955）や Chodorkoff（1954）の主張する曲線的関係でなく，Bills et al.（1951）や椎野（1966）が示しているように理想自己と現実自己および理想自己と他者自己のDスコアがより大きいほど不適応の程度も大きいという一義的・直線的関係が見いだされた。

文　　献

(1) Rogers, C. R., 1947 Some observations on the organization of personality.（伊東博訳編 1962 カウンセリングの理論，カウンセリング論集２，誠信書房）
(2) Combs, A. W., 1948 A phenomenological concept in non-directive therapy. J. of Consulting Psychol., **12**, 197—208
(3) Raimy, V. C., 1948 Self reference counseling interviews. J. of Counseling Psychol., **12**, 153—163
(4) Bills, R. E., Vance, E. L., & Mclean, O., 1951 An index of adjustment and values. J. of Consulting Psychol., **15**, 257—261
(5) Block, J. C., & Thomas, H., 1955 Is satisfaction with self a measure of adjustment? J. of abnorm. soc. Psychol., **51**, 254—259
(6) Chodorkoff, B., 1954 Adjustment and the discrepancy between the perceived and ideal self. J. of Clin. Psychol., **10**, 266—268
(7) Osgood, C. E., Suci, G. J., & Tannenbaum, F., 1957 The measurement of meaning. Urbana, Univ. of Illinois Press
(8) 椎野信治 1966 適応の指標としての自己概念の研究，教心研 **14**，37—43
(9) 菅　佐和子 1975 Self-Esteem と対他者関係に関する研究 —青年期を対象として—教心研 **23**，19—24
(10) 長島貞夫，藤原喜悦，原野広太郎，斎藤耕二，堀洋道 1965 自我と適応の関係についての研究（Ⅰ）—Self-Differential 作製の試み　東京教育大学教育学部紀要 **12**，85—106
(11) 長島貞夫，藤原喜悦，原野広太郎，斎藤耕二，堀洋道 1966 自我と適応の関係についての研究（Ⅱ）—Self-Differential の作製—東京教育大学教育学部紀要 **13**，59—83
(12) 鈴木真理子 1974 児童用 Self-Differential Scale の作製，教心研 **22**，35—39
(13) 芝　裕順 1972 因子分析法　東大出版会

（昭和52年10月31日受理）